

夜の果てに(5)

フリード・ランペ著
松川 弘*・訳

(平成24年9月27日受付)

Am Rande der Nacht (5)

von
Friedo Rampe

Aus dem Deutschen
von Hiroshi MATSUKAWA

(Received Sep. 27, 2012)

税関吏はベンチに腰を下ろしていた。彼は、築堤の暗闇の中で二本の焼きソーセージを平らげた。いささか食欲に、彼は胡椒の効いた熱い肉にかぶりつき、相変わらず遅くなってからわいてくる夜の空腹感を満たした。彼は、後ろに寄りかかって、草むら越しに水面を見つめ、柔らかい微光を放つ睡蓮や動きのない黒い水面、羽根を休めている白鳥たちを見た。彼は背伸びをして、楽しげに息を吸い込み、自分がねっとりした気圏の中で泳ぎ、そこに溶け込んでいくのを感じていた。彼は、ずり落ちた眼鏡越しにぼんやり視線を走らせ、少しうとうとした。

列車が、鉄橋の上をクレムケ氏の頭の方に轟音を立ててやってきて、土手を、オルベルス通りのくすんだ白い家並のそばを通り過ぎていった。税関吏はギョッとした。列車の明かりが黒い水面を、白鳥や茂み、木々の上を走り過ぎるのが見えたのだ。彼は元気を出そうとした。自分が床につく時は、今を措いてなかった。今、眠らなければ、明朝の仕事に差し支える。彼は立ち上がり、計ったような足取りで歩き出した。

彼は築堤から出て、鉄橋の下をくぐり抜けた。脇からクレムケ氏が親しげに手を振った。「おやすみなさい。」「おやすみ。」彼はまた、港通りに入っていった。片側のいくつかのレストランには、まだ明かりがついていて、騒音も聞こえていた。開いたドアから電気ピアノの音が流れ出ているレストランもあった。しかし、通りのもう片側には、ワインレッドの税関の建物が、黒々と静かに横たわっていた。

税関吏は、通りを横切って自宅のドアを目指した。彼はドアの前に立つと、緑色の上着を引き上げ、ズボンのポケットからずっしりと重い鍵の束を取り出そうとした。そのとき、痛々しいかん高い叫び声と口汚いののしりがすぐそばから聞こえてきた。彼は目を上げ、振り向いた。

白いセーラー服を着た小さな男の子が、通りの向い側の、明かりがついたりカーテンが掛かったりしているレストランの大きな窓の前を、大慌てで駆けていた。彼は小さなこぶしを突き出しながら、精一杯走っていた。彼は絶え間なく大声で泣いていた。一匹の小さなダックスフントが、彼の隣で跳ねるように走り、時々うれしげに鳴きながら子供に飛びついた。彼のすぐ後ろを、黒い燕尾服を着たがっしりした大男が走っていた。彼の上着のすそは風になびいていた。男は少年を追いかけ、彼に追いつこうとしていた。そしてこの男のすぐ後ろに、もう一人の男が走り、大男に追いつこうとしていた。それは、港通りを走るアッディとフィップス、催眠術師と司会者だった。

とうとう催眠術師がアッディに追いつき、肩をつかんで自分の方に引っ張り寄せ、もう一方の手を少年の肩に置いて揺すった。少年の金髪の花のつぼみのように激しく揺れた。「どこへ行くつもりなんだ？ 親の許しもなく、夜の通りをどうして一人で駆けずり回っているんだ？ 家出でもする気なのか？ 答えてみる！」

「違うよ」と、アッディはささやいた。

* 広島工業大学工学部電気システム工学科

「なぜおまえは逃げ出したんだ？ どうしてそんな馬鹿な真似をするんだ？」

「僕は別に逃げ出そうとしたんじゃないよ」アッディはすすり泣いた。

司会者が彼らに追いついた。「今はこの子を落ち着かせるのが先だ」と、彼は言った。「あんたは今日この子をもう十分痛めつけたじゃないか。」

「一体何のつもりだ？」と、催眠術師はたずねた。「この子に物の道理をわきまさせないと、もっと大変なことになる。こいつは家出しようとしてたんだぞ。俺には分かっている。俺だって明き盲じゃないからな。」

彼は、アッディに強い平手打ちを食わせた。アッディが大きな叫び声をあげると、今度は、アッディの耳をつかんで頭をグイグイ引っ張った。「家出する気だったんだな？ どうなんだ？ 言ってみろ。」

「違う、違う、違う」と、アッディは叫んだ。

その時、税関吏がもったいぶって通りを横切ってきて、催眠術師に歩み寄った。とんでもないという様子で、彼は手を上げた。「子供を放してやりなさい。そんな折檻はやめなさい。」催眠術師は、税関吏の鋭い視線を見た。彼は、緑色の制服と不同意を示す役人面を見て、アッディに構うことをやめた。

「警部さん、事の真相を見誤らないでください。この子は家出したんですよ。」

「この子がもう、あんたのもとの我慢できなくなったのも、不思議じゃない。あんたはこの子を徹底的に苦しめたからね」と、司会者は言った。「警部さん」と、彼は税関吏に向かって言った。「ここにいるのは、アストリア館の催眠術師で、彼は自分の息子を拘引して、破滅させようとしているのです。」

催眠術師は少し作り笑いした。「まあ聞いて下さい。こいつはまったく恥知らずなやつなんです。私のことがあなたに何の関係があるというんです？ あなたは私には単なるお人好しに過ぎません。」「こうした拘引は許されませんよ」と、司会者は言った。「警部さん、あなたは手出しできないんですか？ 警察がこんな小児虐待を許していいんですか？」

「私は警部じゃなくて、税関吏なんです」と、税関吏は言って、ばつの悪そうに咳払いした。彼は、当惑しながら指で糊のきいた高いカラーをつついた。「誰か他の方に依頼されたらどうです。」

「当てがはずれたようだな」と、催眠術師は笑った。「警察に駆け込んで、洗いざらい打ち明けてみてください。私では、あまりお役に立ちそうにありません。」催眠術師は、足をひろげ腕を組んだまま、司会者の前に立ちはだかっていた。彼は、紅潮した健康そうな顔で、勝ち誇ったように

司会者を見つめていた。アッディは、消え入りそうに小さくなって、父親のかたわらに立ち、疲れ切って絶望した眼差しで、目の前のマイヤー鮮魚店のショーウィンドーをのぞき込んでいた。店は真っ暗だったが、ショーウィンドーには、下から照明された生け簀があって、濁った緑色の水がほのかに光り、横手から新鮮な水が噴流となって泡立ちながら流れ込み、水中では数匹の太った魚がじっとしたまま眠り込み、他の何匹かは、まだ落ち着きなくあちこち泳ぎ回って、銀の鱗でおおわれた太った体を回転させ、通りのアッディをぼんやり目を見張って見つめていた。小さなダックスフントは、アッディの前の舗道にすわりこんで、額にしわを寄せ、キラキラ光るずるそうな目で、彼と大人たちを観察していた。

「この子のことを、かわいそうに思わないのか？ 彼が命を落としそうになっているのが、あんたには分からないのか？」司会者はオズオズと尋ねた。

「馬鹿なことを」と、催眠術師が言った。

「今日もまた、彼は嘔吐したじゃないか。見ていたんだぞ。」

「この駄犬が起こした突発事故が原因なんだ。こいつはもうお払い箱だ。やい、そんなに見つめるんじゃない、いくら尻尾を振っても無駄だぞ。」

アッディは、また小声で泣き出した。途方に暮れて、彼は税関吏を見つめた。税関吏はすばやく視線をそらせた。彼は、考えあぐねて顎をこすった。アッディはまた、ガラス越しに自分を見つめている魚の方を見た。

「だめだ」と、司会者は絶望して叫んだ。「この子をあんたの手元に置いておくことはできない。この子はあんたから解放されるべきだ。あんたは父親にふさわしくない。そうでしょう、旦那」と、彼は税関吏に向かって言った。「彼が子供をどう取り扱っているか、あなたもご覧になったでしょう。万一の場合、証言していただけますね。この子をどこかで受け入れてもらえる可能性はないでしょうか？ この子を引き受け、上手に取り扱ってもらえるような、まともな方はおられないでしょうか？」

催眠術師は、身じろぎもせず立ち、ニヤニヤ笑っているだけだった。アッディは、緊張して司会者の方を見ていた。彼の目に、一瞬、驚きの小さな輝きが宿った。税関吏は頭を上げ、ごごちない足取りで少し近寄った。彼の年老いた灰色の目が、眼鏡の奥でキラリと光った。彼は、咳払いをして何か言おうとしたが、落ち着き払って少し笑ってさえている催眠術師を見ると、当惑して目をそらし、オズオズと微笑んで、こう言っただけだった。「失礼ですが、こんなに小さな子供を興業目的に使うことを、警察が許可しているんですか？」「いや、もちろんそれは許可されていないさ」と、催眠術師は叫んだ。「そうですよ、旦那、あなたの

言われる通りだ。警察はそれを禁じるでしょう。私もそれを当てにしたい。」

「当てにするのは勝手だが」と、催眠術師は言った。彼は、即座に分厚い紙入れを取り出し、中をひっかけ回して捜した。「あった。これが許可証だ。」

「よく分からんな」と、税関吏はつぶやいた。

「この件について何も知らないあんたには分からんだろうな。私が正しいことが分かっただろう。これ以上詰まらぬことで文句をつけるんだったら、警察に出頭して、あんたを訴えてもいいんだよ。もうやめよう。こんな馬鹿話はもううんざりだ。まともな人間の忙しい仕事の邪魔をする前に、あんたもよく考えてみることだね。それじゃ、おやすみ、旦那。まあぐっすり眠ることだね。そうすりゃまた頭がまともになりますよ。」催眠術師は、司会者の方を向いて言った。「あんたにもひとつ文句をつけなきゃならないな。でも今はよそう。アッディ、帰ろう。」

アッディはうなだれて、オズオズと手を差し出した。父親はその手をしっかり握ると、彼らはそこから歩み去った。ダックスフントが耳をたれて彼らのあとをチョコチョコ追いかけた。催眠術師の足音は、静かな港通りに硬く響いた。「あの子を連れて戻るんだ。ぞっとするよ」と、司会者は言った。

「もうどうしようもないのかね?」と、税関吏が尋ねた。

「分からんね」と、司会者は疲れた様子で言った。「今は警察も奴の味方だからね。」

「どうだかね?」と、税関吏は言って、きまり悪そうに笑った。「場合によってはあの子の面倒を見てくれる人がいないものかどうか、あんたさっき尋ねたね。」

「そんな気がしたよ」と、司会者は叫んだ。「どうしてあんたは何も言わなかったんだい?」

「結局は無駄だからね。」

「ああ、多分ね」と、司会者は言った。「あんたひよっとするととても孤独なのかい?」

「まあね。」

「あの子を、あんたに預けてもよかったんだ。残念だな。いい子なんだが。」

「ああ、家内は死んでるし、子供もいないんだ。」

「すまなかった。もう帰らなければ」と、司会者は言った。

「もう一度、警察にかけ合ってみれば?」

「でも、僕だってあまり当てにはならない。実を言うと、自分自身の事で手一杯なんだ。家内が重病なんで、旅に出るつもりなんだよ。」

「そうなのか」と、税関吏は言った。

彼らは握手した。司会者はふさぎこんでのろのろとアストリア館に帰っていった。税関吏はドアの錠を開け、ぎこ

ちなくもったいぶって暗い階段を昇り、さびしい自宅に入ってしまった。

司会者がふたたびアストリア館にたどり着いたとき、二、三人のボーイと少年がすぐさま歩み寄ってきた。「どこへ行かれてたんです? ずっと捜してたんですよ…」

「今戻ってきたんだ、落ち着けよ」と、司会者は言って、庭を通り抜け、ニレの木が生え書き割が置いてある裏庭に入ってしまった。毛皮猟師の扮装をした男と少女が、興奮して彼に歩み寄った。「待ちかねたよ。すべてが中断してるんだ。何とかしてくれないか?」男と少女は、茶色の革具を身につけ、首には赤いスカーフを巻き、大きな帽子をかぶっていた。彼らは立腹して首を振っていたので、耳もとの大きな輪がユラユラ揺れていた。

「いますぐ舞台上がってくれ」と、猟師たちは燃えるような目をして叫んだ。

一人の少年が司会者のところに飛んできて、かん高い声で言った。「すぐ支配人のところに来てください。」

「分かった、すぐ行く」と、司会者は答えた。

「だめだ、まず舞台上がって、俺たちを紹介してくれ」と、猟師は叫んだ。

「待ってくれよ」と、司会者は言った。

彼は、うしろから舞台上がって、何かをしゃべった。彼はそれを下準備なしでやってのけ、ふたたび舞台を下りた。猟師たちが登場し、音楽は太鼓の連打に変わった。

司会者は、アストリア館の事務所に向かった。重い足取りで彼は階段を昇り、支配人の部屋のドアをノックした。彼が入ったとき、部屋の中は彼が想像していた通りの状況だった。催眠術師がすでにそこに来ていた。

書物机についていた支配人は、高い腰掛けにすわったままグルリと体の向きを変えた。彼の肥えた手は、テーブルの甲板のうえに仰々しく置かれていた。催眠術師は、書物机の縁にもたれて、腕を組み、勝利を確信したように司会者を見つめていた。

残念だが、あんたの勝ちだ、お願いだから、そっとしておいてくれ。司会者はこう思った。

支配人は、脂ぎった目で悲しげに司会者を見つめていた。「これは一体どういう事なんだ、駄目だよ、君。走り去って舞台に穴を開け、自分とは何の関係もない事に首を突っ込むなんて…」

「あの子がいじめられるのを、もうこれ以上黙って見ていられなかったんです」と、司会者は言った。

「あの子はいじめられてるわけじゃない。それは違うよ」と、支配人は嘆息した。「見受けるところ、君は、教育やしつけというもの何たるか、まるで分かってないようだ。子供はああすることで一人前になるんだよ。今ここで見た

だろう。当たり芸がひとつできたんだ。今日のプログラムのハイライトだよ。」

「もう私は何も申しません」と、司会者は言った。

「弱気に出ましたね」と、催眠術師は笑った。

「どうも気に入らないね」と、支配人は言った。「君には、仕事にたいする関心や同僚との友愛精神が足りないようだ。そんなことじゃ、満足な仕事はできないよ。わしはずっと前から君のことを観察していた。君のやることには気概というものがない。興をそぐ者にはいてほしくないんだ、分かるだろう。」

「でも、自分の義務はいつもきちんとしております」と、司会者は自信なさそうに言った。彼は、表情のない灰色の顔をして、無気力に立っていた。確かに彼らの言う通りだ、もう自分にはやる気が失せてしまった。

「義務だって」と、支配人は叫んだ。

「それだけで果たして十分かね」と、催眠術師が口をはさんだ。「その通りだ」と、支配人は言った。「義務だけではだめだ。さらに何か加わらなくてはね。君はそれに気がついていないようだが。活気や感激、一種の独創性といったものがそれだ。」

「心配事があると、いつも気分が乗るとは限らないんです」と、司会者は言った。

「一体どんな心配事があるんだね？」

「家内が重病なんです。」

「なるほど、それでは確かに気が滅入る。でも、それに打ち勝たなくてはいけない。君はいつもそんな悲しげな顔つきでうろつき回っているようだが、それはまずいよ。ところで、君はわしに何か尋ねようとしていたようだが。さっき、何かそんなことを言わなかったかね？」

「いえ、大したことじゃないんです。」

「言ってみなさい！」

「一日だけ休暇を頂ければありがたいのですが。家内のところに行けますので。」

「そんなことだろうと思ったよ」と、支配人は嘆息した。「仕事はいつも二の次だ。頭はいつも上の空だ。だめだ、そんなことじゃいけないよ。」支配人は、深い溜め息をつきながら身を起こし、司会者の方に歩み寄って、その肉付きのいい手で彼の腕をそっとつかみ、沈痛な面持ちで彼の顔をのぞき込んだ。「とても残念だが、われわれはしこりを残さずに別れることができると思う。君はわしの経営方針に合わないんだ。わしは、君には期待をかけていた。レスリングの司会もできる司会者は貴重だからね。でも、そんなに無気力で活気がないようなら、この長所もあまり高くは評価しかねる。わしは君を見損なったよ。どうかね、後釜が見つかるまで、もう数日出演してくれ。それから出ていくがいい。承知かね？」

「ええ、それで結構です」と、司会者は言った。

「その方がきつといいよ」と、支配人は言うように彼の体を突いた。「そんなに深刻に受けとめる必要はないよ。人生には小さな失敗はつきものだからね。いいかね。そう考えれば、気持ちよく奥さんのところへ行けるってものだ。それが君の望みなんだろう。」

司会者は無言で立ちつくし、床を見つめていた。それから彼は、ゆっくりとドアの方に向き直って、部屋から出ていった。彼は階段を降りて、フロアに入った。毛皮獵師のナンバーはすでに終わっており、人々は舞台にあがって踊っていた。彼はベランダを通り抜けて裏庭に出てから、ニレの木陰のベンチに腰を下ろした。彼は、ライン河畔のシュトルツェンフェルス城を描いた書き割を見つめていた。脇で、二人のレスラーが立ち話をしていた。催眠術師が、支配人から贈られた太い葉巻を口にくわえて中庭に入ってきた。彼は司会者を見かけると、その背後を通り抜けてレスラーたちの方に歩み寄った。彼らはアルバロスの話をしていた。「何だって？ 君たちはまだ彼を見かけてないのかい？ 行ってやらなくちゃ。彼はまだ楽屋で寝てるんだ。」彼らはもう一度一緒に行きたがった。彼らはアルバロスの楽屋を知っており、木造のバラックに入ると、アルバロスの部屋に向かった。電灯のスイッチをひねると、アルバロスは相変わらず眠っていた。一人のレスラーが、体に掛けられたバスローブをそっとうしろに引っ張った。催眠術師は、長い間、彼のすり傷だらけの体を見つめていた。アルバロスは、まだ体を洗ってはいなかったので、血が赤黒くその四肢にこびりついていて、真珠層の色に近い青あざが、体のあちこちにできていた。それは、ディークマンのこぶしが当たった個所だった。彼の唇はひび割れ、半開きになっていた。そして彼のすべすべした髪は乱れ、黒髪が束になって額の上に掛かっていた。濃い青色のパンツは、腰のところでクシャクシャになっていた。

「素晴らしい体だ」と、催眠術師は言った。「血みどろで傷だらけだがね。」

そのとき、アルバロスは急に目を開けた。彼は、長い間彼らを見つめていた。それから彼は部屋を見て、自分が丸裸でそこに横たわっていることに気づいた。

「なぜ君たちはここにいるんだ」と、彼は尋ねると、怒ったような視線を彼らに投げかけた。彼は、血がかさぶたになってこびりついた皮膚をこすった。

「もう行こう」と、他のレスラーたちはつぶやくと、素早く姿を消した。

ハイン・ディークマンは着替えをすませると、ジョニーとともにバラックから立ち去った。彼らは、司会者がぐったりとニレの木陰にすわっている中庭を通り抜けていった。「フロアを通り抜けたくはないね」と、ジョニーは言っ

た。「ここからも出られるぞ。」小さなドアが中庭と廊下をつないでいたので、彼らはその廊下を歩いて港通りに出てきた。ハインは黄色いハーフコートを着て、丸い頭に山高帽を載せていた。彼は前方を見つめたまま、何も言わなかった。ジョニーは、ときどき脇からハインの方を盗み見た。彼が何か言うと、ハインはぼんやりうなずいた。彼らは市の中心部のあるホテルに滞在していた。彼らは、濠に沿って歩いていった。ハインが一瞬立ち止まって、深く息をつき、黒い水面を見つめた。

「聞いてくれるかい？」と、ジョニーが切り出した。

「なんだい。」

「今日の出来事をもう君は覚えていないんだろう。明日は、まったく新しい生活が始まるんだものね。」

「馬鹿なことを」

「自分が何を用心しなければならないのか、君には分かっているのかね？」と、ジョニーが尋ねた。

「用心して、それが何の役に立つというんだ。」

「君がそのつもりなら、うまくいくんだがね」と、ジョニーは言った。

「もう身動きが取れないんだよ」と、ハインは言う、重苦しい黒い水面を見つめた。「もうにっちもさっちも行かないんだ。俺はあさましい豚野郎だ。それ以外の何物でもない。」

ジョニーは当惑し、立腹して息を吐いた。「君ならできる。しっかりするんだ。」

「俺は卑劣だ。人間の屑だ。それ以上のものじゃない」と、ハインは言った。

ベルク氏のフルートの調べは、次第にかすかになっていった。ガラスのように透明な最後の響きが、庭をこえてただよい、かき消され、静かな大気の中に消え失せた。それで演奏が終わった。ベルク氏は疲れ果てていた。彼は口からフルートを離すと、しばらく窓際に立って、夜の風景を眺めていた。それから彼は、暗い部屋のなかに引っ込んだ。

「彼はやっと吹きやめたわね」と、ヤコービ夫人は言った。

「ええ、やっと」と、マーラー夫人はため息をついた。「若い人たちは、まだ人生の厳しさを知らないのね。」

「私だって知ってるわけじゃないわ。でもね、あの人は危篤なのよ。」と、ヤコービ夫人は言った。

二人は部屋中に明るく暖かい光を放射する電気スタンドが置かれたテーブルについていた。マーラー夫人は、目を泣きはらしてソファに腰を下ろしていた。彼女の手は膝の上に置かれ、涙にぬれて小さくクシャクシャに丸められたハンカチを握っていた。彼女はヤコービ夫人が大きな

テーブルクロスに刺繍をほどこす様子を眺めていた。クロスの上には、青インキでけばけばしい小さな花束の型が描かれていた。ヤコービ夫人は、その型に合わせて、様々な色のたくさんの絹糸で刺繍を縫いつけていた。

「こんな時刻まで付き合っていて、とても感謝しています」と、マーラー夫人は言った。テーブルの上には小さな紙切れと鉛筆が置かれていた。ヤコービ夫人は、死亡広告の下書きをしようとしていたのだ。マーラー夫人は、時々、死者のいる部屋に通じている半開きのドアの方を不安げに見つめた。狭い隙間を通して、何か不気味な闇が居間に流れ込んできた。

「喜んでお手伝いしますよ」と、ヤコービ夫人は言った。「何なりと申し付けて下さい。明日の早朝、すぐに新聞社に行って、死亡広告の掲載を依頼し、それから「糸杉」葬儀社にまいりましょう。この「糸杉」社できっと満足されると思います。あのときも、とても役に立ちましたから。でも、今、とても重要なことを思い付きました。ご主人は火葬をお望みでしょうか、それとも土葬にしてもらいたいのでしょうか？」

「まったく見当もつきません。そのことについて、彼は何も言ってなかったものですから。どうしたらいいんでしょう？」と、マーラー夫人は言った。

「私の夫は、火葬するように指定していました」と、ヤコービ夫人は言った。「その方が清潔だと考えたんでしょう。もちろん好みの問題ですけど。」

「本当に、どうしましょう？」と、マーラー夫人は言った。

「考えてみてください、奥さん、まだ時間はありますから。」

窓は開いたままで、港の方から、通りをこえて、汽船のうつろな警笛が響いてきた。

「汽船が出港するのね」と、ヤコービ夫人が言った。

そのうつろな訴えかけるような響きは、マーラー夫人の心を激しく突き動かした。彼女は、急に泣き出した。

「ああ、いやだ。自分が独りぼっちになってしまったなんて、考えたくもないわ。」

ヤコービ夫人は大きなため息をついたが、クロスに刺繍する手を休めなかった。彼女は、小さな緑の葉を正確に縫いとるのに大きな注意を払わねばならなかった。それは容易ではなかった。

「お願いですから、一晩中私のそばにいて下さい」と、マーラー夫人はすすり泣きながら言った。

「ええ、いてあげますよ。クロスも仕上げなくちゃいけませんからね」と、ヤコービ夫人は言った。

警笛を鳴らした汽船は、アデライーデ号だった。ともづなが解かれ、アデライーデ号は港を出て、川を下り始め

た。船は、ゆっくり押し出すように川を下っていった。

アントーンは、甲板に立って出港の様子を眺めていた。オスカルは、しばらく彼のそばに立っていたが、船室に下りていった。彼はとても疲れており、横になりたかったのだ。今日は本当にくたびれた。

アントーンは、町の方を振り返ってみた。灯火が次第に相接して近づいてきて、見る間にぼやけてくすんだ輝きと化し、長い黄色い筋になって沈み、その筋がさらに分解していった。こうして船は闇のなかを航行した。広々した牧場がかすめ過ぎた。堤防のきわの家々は、黒い塊になってすべり過ぎた。造船所の骨組みが夜の闇のなかにそびえたっていたが、それも背後に消えた。月が、雲の多い空に、一瞬、灰色がかかった銀色の老いた顔をのぞかせ、輝きを水面に投げかけ、無限に広がる牧場の上に灰色の微光を注ぎかけた。牧場では、家畜が微動だにせず立ち、あるいはその重い体を草むらのなかに横たえていた。

船はさらに進んでいった。川幅が次第に広くなり岸辺の家は少なくなっていった。大気はだんだんさわやかになり、涼しい風が、海風が吹き始めた。

アントーンは、相変わらず甲板に立って、周囲の広々した空間を眺めていた。

そのとき、誰かが突然音もなく近づいてきて、彼のかたわらに立った。それは給仕のパウアーだった。

「あんたはまだここにいたのか？ 退去しなかったのかい？」と、アントーンは驚いて叫んだ。

「ええ、こっぴどく叱ってください！ あなたのおっしゃる通りなんですから」と、パウアーは罪を意識したように言った。

「なぜ退去しなかったんです？」と、アントーンは尋ねた。

「出ていくつもりでした。私は身の回りの品を荷造りしたんですよ。でも、結局できませんでした。万事休すだと思っただけなんです」と、パウアーは言った。

「僕だったら、出ていくんだがね」と、アントーンは言った。

「もうどうでもいいんです」と、パウアーは言う、ふさぎこんで水面を見つめた。「ここにしようがどこにしようが、結局は同じことなんです。」

「それは分からないよ」と、アントーンは言った。

「どうか、好きにさせてください。そうするより他ないんです」と、パウアーは言った。

「馬鹿なことを」と、アントーンは言った。

「もう私は救いようがないんです」と、パウアーは言った。

「パウアーさん、それを言っちゃおしまいだ。」

パウアーは肩をすくめた。

それから彼らは黙って景色を眺めていた。

「もう行かなくては」と、パウアーが言った。「聞こえるでしょう。彼が私を呼んでいます。」

「行かないでおきなさい」と、アントーンは頼んだ。

「いいえ、行かなくては」と、パウアーは言った。「そうするより他仕方がないでしょう？」

「ひどい話だ」と、アントーンは言った。

「そういうことです」と、パウアーは言う、無言で甲板から階段を走り下りた。

アントーンは、困惑してあたりを見つめていた。

汽船はさらに川を下り、機関は重苦しく作動していた。

解 説

一八九九年十二月四日にブレーメンで生まれたフリード・ランペは、ハイデルベルク、ミュンヘン、フライブルクの各大学で、文学と美術史、文芸学を学び、「月刊シェーネマン」と「ブレーメン報知」の編集者、次いで、ハンブルク公立図書館の司書、後に、ベルリンのローヴォルト書店の原稿審査員となった。

一九三三年の十月末、彼は、最初の小説『夜の果てに』を、ローヴォルト書店から出版した。だが、彼の喜びはほんの束の間だった。十二月に、彼は次のように告白せざるをえなかった。

「僕は自分の小説のことで大いに心を痛め、しばしば意気消沈しさえしている。ブレーメンでは理解されず、こきおろされ、大方は拒絶されている。」

さらにひどい仕打ちが彼を見舞った。この小説が、ドイツ人女性と黒人男性の恋愛を描写し、同性愛にたいして偏見のない理解を示しているという理由で、発禁処分を受けたのだ。

次作『九月の雷雨』は、一九三七年のクリスマス直前に刊行されたが、読者や批評家にはほとんど注目されなかった。

そして、一九四五年五月二日、もうどこにも砲声が聞こえなくなったドイツ降伏の直前、ベルリン郊外で、ロシア兵の放った銃弾がランペの命を奪う。

彼の文学を賞讃する現代作家は少なくない。たとえば、ハインツ・ピオンテクは、「これほど簡潔で均整のとれたリズムをもつ散文は、少なくとも現代のドイツ文学では貴重な存在である」と述べ、ヴォルフガング・ケッペンもまた、「フリード・ランペの散文の文章は、憂愁と美にみちており、繊細であると同時に力強い」と評価している。

ランペは、ますます捉えがたくなっていく現実を文学に定着させることで確認し、あわせて、現実をめぐる自己の苦悩を克服しようとしたのである。

一九三二年、友人のヨハネス・プファイファー宛ての手紙の中で、ランペは、処女作『夜の果てに』の創作意図について次のように説明している。

「僕が少年期を過ごした港町プレーメンの一角の、夜の八時から十二時までのわずかな時間帯の出来事が描かれます。「あまたの運命が私の運命となりあい／人生はこもごもそれらすべての運命を奏でている」というホフマンスタールのモットーに則って、いくつかの短いシーンが映画のように互いに絡み合いながら進行していきます。すべてが軽やかに流れ、その結びつきはごくゆるやかで、絵画的、抒情詩的、しかも独自の雰囲気をかもしだすのです。」

こうした意図は、かなりの部分実現されている。

北ドイツの港町のさまざまな人々の運命のモザイクであるこの小説は、それぞれ一〜九ページの短いシーンに分解できる。あるシーンが別のシーンに接続し、その連続の中で、個人の運命が他者の運命と、まさにホフマンスタールの詩句が示すように関連づけられ、織り合わされていく。こうした手法は、映画の技法の文学への応用ともとれるが、同時に、シュニッツラーが『輪舞』で用いた技法を連想させ、伝統と現代という両極のあいだに占めるランペの精神的な境位を暗示しているように思われる。

ランペの語りのカメラは、しなやかなオーバーラップ、厳格なカット、そして冷静なパンショットを駆使しながら、登場人物たちを映し出す。貨客船「アデライーデ」が出港の準備を整えながら港に停泊しているあいだに、読者は、ネズミを観察する子供たち、売春婦の娘をもつ公園の管理人、はるかな土地への憧れから地理の教師になった男、彼と切手を交換する友人の税関吏、マゾヒストの給仕とサディストの船長、ヴァリエテでの試合の最中にはじめて自分の同性愛の性癖を意識したレスラー、自分の息子を見世物にする催眠術師、死の床にある老人、夜になるとフルートでバッハを演奏する肺病やみの若者と出会う。これらの見かけは何気なく結びつけられた人物たちは、同時に行動し、体験する。伝統的な主人公はここには存在しない。だが、最初のうちは無秩序な混乱と見えたものが、いわば夜の力で統合され、束ねられていく。この小説のタイトルにもなっている「夜の果て」で、すべてのかかわり合いが生起するのである。

ランペは、登場人物のさまざまな生活領域へのカメラ的なフェードインと、これらの登場人物の世界の結合によって、彼らの日常とその苦悩ともども、小市民の社会のイメージを描き出そうとした。

読者は、こうした社会に、何か名状しがたい重苦しさのしかかっている、それが人々を不安に陥れているという印象を抱く。ここでは、人々の相互関係はほとんど阻害され、登場人物たちは、孤立と孤独、それに起因する精神の

崩壊に直面することになる。たとえば、冒頭部では、自分を老いの孤独から救い出してくれる話し相手を空しく待ち続ける老人の生活が描写されている。

若者たちもまた、社会の空しさを感じとり、そこから逃れようとする。子供たちですら、港に停泊している各国の船を眺めることで、一瞬ではあるが、単調な日常から逃れ出る。

孤独のもうひとつのヴァリエーションは、伝統的な人間関係とそれに結びついた誠実の概念の崩壊である。ランペは、これをベルタとカールの夫婦関係で例示する。夫が知らないところでベルタがくりかえすアバンチュールによって、この関係の脆さが描写されている。彼女は、夫に悪いと知りつつ、遊覧船の航海士や酒場で出会った黒人と浮気をする。

退屈と孤独のアイロニーが、小市民の誠実な結婚生活からベルタが脱出しようとする主因をなしており、それがこの小説全体にペシミスティックな調子を付与しているのである。

ランペが描く世界は、いわば破綻した牧歌の世界であり、そこで人々は、この牧歌を修復するか、あるいは、今いる世界からそれぞれの仕方と脱出しようと試みる。

日常の世界から脱出し仮象の世界の幻想に没入する可能性が、この小説では、ヴァリエテによって示されている。ダンスや舞台芸、催眠術、レスリングからなるヴァリエテは、しばしのあいだ、人々を日常のみじめさから解放し、彼らが別の世界を垣間見ることを可能にしてくれる。

現実との戯れとしてのヴァリエテの性格が、催眠術のシーンでとりわけ明確になる。観客たちは、催眠術にかかった少年によるナイチンゲールの本物そっくりの鳴き真似に耳を澄ませ、熱狂する。この霊媒役の少年が、現実には、欲の皮の突っ張った厚顔無恥な父親に商品扱いされ、搾取されているだけに、この戯れのペシミスティックな性格がそれだけ際立たされることになる。この世界では、子供すら人生の負の領域に圍繞されているのである。

旅行記の読書や切手の収集といった行為もまた、別世界へのいわばビーダーマイヤー的な逃避の可能性を示している。息子たちに旅行記を読み聞かせる地理教師ヘニッケにとって、遠い国々への空想旅行は、何の慰めも見いだせない世界における自己活性化の代用物と化している。切手をめぐって、「キューバ、マダガスカル、セイロン、アフガニスタンといった言葉が、重苦しい夢のように夜の中にしたり落ちる」ととき、頭の中だけの話とはいえ、自分がそこに滞在しているかのような幻想が生じてくる。

何か名状しがたいものが人々にのしかかり、幸福に、気楽に生きる可能性を彼らから奪い取る。その原因は、「老年、病氣、死といった極限状況」だけではない。重苦しさ

の原因は、より深いところに潜んでいて、それは、ピオンテクがほのめかしているような性格をそなえている。

「重苦しい空気が港にのしかかり、下劣な退廃の気配が人々をかすめる。プルジョワのファッサードは揺るぎを見せ、その背後に、人々は底知れぬ邪悪な闇を予感する。」

ランベは、さまざまなモチーフや象徴を用いて、この切迫した災禍の雰囲気喚起している。時間と自然、死、音楽といったモチーフの結びつきが、出来事の背景を形づくり、登場人物たちの平凡な日常の一端により深い意味を付与する。

とりわけ、ネズミと白鳥は、ライトモチーフとしてくりかえしあらわれ、死と生、闇と光明、諦念と希望の対立を具現している。

ネズミは、時代にたいする人々の不安感の表現であるともいえるが、「ネズミを小市民の黙示録的な動物に様式化」(ヴァイトマン)したランベは、白鳥たちの安全に心を砕く公園管理人に、いわばカロンの役を割り振っている。

黒い小舟に乗って、毎晩、公園の濠を見回る彼は、生と死、つまり白鳥の生とネズミによるその死のあいだの均衡を保とうとしているのである。

ランベは、個人の運命のはかなさに、音楽や進行する時間の変ることのない歩みをもつ連続性、恒常性を対置させている。登場人物のひとり、バルク氏のフルートの音色は、家々の屋根を飛び越えて、すべての人々に聴き取られる。この調べは、様々な悩みをかかえた人々に慰めをもたらすことになる。

音楽は、ここでは、生と死を結び合わせる恒常的な循環の表現とも解される。さらに、このフルートの調べは、時間のリズムカルな進行をも具現しているのである。こうした、死と音楽、時間のモチーフの結びつきには、ホフマンスタールの影響が見てとれる。

ここでは、多数の個人の運命の絡み合いが、目に見えない病に苦しむ社会のイメージを生み出している。人々は、日常の現実から脱出しようと試み、ヴァリエテで気を紛らわし、総じて何かに当てどもなく駆り立てられている。

人間の尊厳を奪い、その感情を無視し、彼を生産のファクターに還元してしまう現代の経済システムにたいするランベの批判的な姿勢が、ホテル「アストリア」のヴァリエテ興行の責任者である司会者の個人的な事情の描写からうかがえる。病気の妻を見舞うために休暇をとることを願い出た彼は、支配人から解雇を申し渡される。支配人は、子供を毎晩、催眠術の霊媒として登場させることを少しも悪いとは思わぬ、利欲にかられた経営者の権化である。彼と際立った対照をなすのが司会者で、妻にたいする同情と催眠術のナンバーに反対の態度を明確にすることで、彼は、支配人と対立する。解雇通知という形での司会者の敗北

は、この小説のペシミスティックな基調に沿うものとなっている。

「アデライーデ」の給仕パウアーもまた、運命にたいする人間の無力さを具現しているといえる。彼の場合、この無力さは、サディストの船長にたいする彼の隷属関係や、こうした状態から自己を解放できない彼の無能さと関連づけられる。

こうなると、ヴァリエテやダンスでの人々の享樂も、きわめて疑わしいものに見えてくる。それは、すでに崩壊しつつある世界に直面して、もう一度、わずかなあいだでもそうした現実を忘れて生きようとする、付け焼き刃的な、しかし死に物狂いの試みに他ならない。

この小説の場面はすべて、時間的に、夕方や夜、あるいは昼から夜への移行期に設定されている。夕暮れや夜は、それがくりかえし強調されることで、ある意味を獲得する。

夜は、市民生活の日常の暗い対応物である。売春やヴァリエテ、ダンス、ジャズの巷である夜は、肉体や精神に陶醉、享樂をもたらし、昼間の現実を一瞬忘れさせてくれる。

時代が終末期にさしかかっているという感情は、秋という季節の到来によってさらに強められる。九月は成熟の月であるが、滅びと腐敗の始まる月でもある。

ここにも、世紀転換期の文学、とりわけトラークルの抒情詩の影響が指摘できよう。

映画のカメラワーク、短いフェードインの技法と同じように、ランベの視線は、ある運動から別の運命へと並列的に移行していく。その結果、読者は、さまざまな人々の運命の絡み合いに直面することになる。ランベはここで、伝統的な小説の筋の骨組みを意図的に壊そうとしているのである。

事物や事件の永遠の流れの中から偶然抜き出された世界の一端が、まやかしと正気、近さと遠さ、死とフルートの不断の響き、平凡なものや奇妙なもの、ネズミと白鳥という両極のまわりをめぐる。

ランベの描く社会の透視画は、陳腐な日常の出来事に潜む憂鬱の深層構造を明らかにしている。現実、言葉による把握から身をひくきわめて複雑で曖昧な存在であるが、ランベはこのことを、催眠術やヴァリエテのもつ二重の意味をテーマにすることで暗示しているようだ。

また、近くから遠くへの視界の変化も、現象の真相を見極め、より深い意味のレベルを開示しようとするランベの作家としての特性の一端を示すものである。このことは、いわゆる「書割」についての次のような会話にとりわけ顕著に認められる。

「[道具がここで野ざらしにしてあるなんて思いもしなかった。天気がいいときはこれでもいいが、雨のときは…]」
「雨でも平気だよ。もうかなりいかれてるからね。よく見る

と、雨にぬれていたんだ個所や縞がはっきり分かる。でも、遠くから見ると、まだまだ立派なものだ。客はそんなにまじまじ見るわけじゃないから、これで十分なんだ。』

遠くから見た牧歌的な世界は、近寄って見ると、不安と苦悩に満ちた世界であることが明らかになる。確かに書割は保持されてはいるが、よく見ると、それが無惨に壊されていることが分かるのである。

ランペは、世紀転換期の文学のみならず、国外の現代文学にも通暁していた。新しいメディアである映画ではじめて用いられ、ジョン・ドス・パソスが自作に応用した、場面から場面へ跳躍する現実の叙述法、いわば場面の「モンタージュの技法」を、ランペはいちはやく採り入れている。

一九二五年に刊行されたドス・パソスの『マンハッタン乗換駅』とランペの『夜の果てに』の文体や構成の類似は明白である。両作家とも、現実の断片的な再現に伝統的な社会の諸価値の破壊や社会そのものの崩壊を反映させることで、テーマと文体を補完している。

同時代の外国文学の影響を受けた革新的な文体と世紀転換期の文学のテーマを同じ作品の中で結びつけようとしたランペの試みは、一見矛盾した行為であるように見えるが、これは、現実を文学に定着させることで克服しようとする彼の実験の試みのひとつと解することができよう。映画的なモンタージュの技法にしても、世紀転換期の文学のテーマにしても、ますます捉えがたくなっていく現実を書くことにより確認する可能性を示しているのである。

新即物主義やビーダーマイヤーにしても、その「明確に

近接照明された細部」や「事物の世界」の偏愛といった要素を強調するなら、映画のモンタージュとの距離はそれほど大きなものではなくなる。ランペの小説においてビーダーマイヤーと新即物主義、細部に焦点を合わせる映画的手法の結合が生じたのは、これらすべてが、文体的には細部へのこだわり、テーマ的には現実についての苦悩を共有していたからに他ならない。

ランペのビーダーマイヤー受容で注目されねばならないのは、その中に含まれた非政治的な牧歌、まだ秩序を保っている世界の可能性である。彼は、カオスとしての世界にある種の秩序をもたらすことに強い関心を抱いていた。彼がドイツ古典主義の作家たちを高く評価したのは、彼らが現実を明確に、秩序立てて叙述する不屈の能力をそなえていたからである。彼らの作品には、「いつも清々しいユーモアにみちた明晰さと安らぎが認められ、それらはいつまでも心地よく作用する。」このような明晰さや安らぎを手に入れることは、世紀転換期以降の、技術や経済、社会の大変動を体験した現代作家には、ますます困難になってきていた。そうした状況下で、ランペは、継ぎ目がほころびた世界を少なくとも観念的に秩序づける手がかりを見いだそうと苦闘したのである。

この翻訳は次のものに拠った。

Lampe, Friedo: Das Gesamtwerk. Hg. von Jürgen Dierking u. Johann-Günther König. Hamburg 1986.